

(2) 地域力に関する分析

① ヒアリング調査実施の概要

既往資料やデータ等から読み取ることができる地域の現状および課題等を踏まえ、地元住民、NPO・市民グループ、行政へのヒアリング調査を実施した。

地域力の調査に際しては、個人あるいはグループとしての活動の概要・効果・課題に加えて、生活者としてのリアリティを引き出すことを主眼として、ヒアリング相手に対し、①グループ（地域コミュニティ）における活動の状況と、②住民としての個人的な実感の両方の観点からの意見を引き出すようにヒアリングを実施した。

② ヒアリング対象

<地域からの視点>

地区		ヒアリング先名称
水窪		NPO 山に生きる会
		ここほれワンワン塾
佐久間		NPO 法人がんばらまいか佐久間
		山香ふるさと村女性部
龍山		ドラゴンママの店
天竜	二俣	川島米穀店
	熊	NPO 法人夢未来くんま
	横川	有限会社いっぶく処横川
春野		春野木材加工協業組合
		マルセン砂川共同製茶組合
		NPO 法人春野山の楽校
引佐		NPO 法人 大好き渋川 てんてんゴー渋川
行政(浜松市)		教育委員会
		企画部資産経営課
		企画部地域自治振興課
		天竜区森林整備課
		天竜区地域振興課

<都市からの視点>

地区	ヒアリング先名称
浜松市(中区)	魅惑的倶楽部(エキゾチッククラブ)
	浜松NPOネットワークセンター
	NPOブレンティアの森
	NPO 法人 天竜川・そま人の会

ヒアリングの結果を、地域力を構成する以下の3つの項目ごとに一覧表に整理する。

- 定住条件（医療福祉、子育て、学校、買物、生活支援 等）
- コミュニティ活動（食品加工、NPO 活動、施設運営 等）
- その他影響要素（交通・インフラ、仕事・雇用、UIJ ターン 他）

【ヒアリング結果 整理表 <地域力>】

調査対象			地域力		
			定住条件(医療福祉、子育て、学校、買物、生活支援 等)	コミュニティ活動(食品加工、NPO 活動、施設運営 等)	その他(交通・インフラ、UJ ターン 他)
地域からの視点	水窪	NPO 山に生きる会	・昭和40年代には 12,000 人いたが、今は 3000 人足らず。 ・引越し林道といわれ、道路が家の前まで整備され、ガスがひかれると、自給的だった日常が激変し、町に引越していく。不便な暮らしに耐えられなくなるのと、お金がないと生きられなくなる。 ・16集落のうち機能していないのが2集落。中心部に98%が住んでいる。 ・今、住んでいる人の周りから、明るく住みよくなるように森林の手入れをすることが先決。せめて道路際を。 ・昨年の嵐でドミノ倒しになったところがある。岩盤がすぐにあって、ヒノキの50年林だと根が出てしまう。 ・買い物は地元を利用せず(ほしいものがない)、浜松、浜北へ。 ・病院は天竜、浜松へ。	・60代が中心で14名で結成。最年少は40歳。得意分野を生かした山の案内などの活動をはじめて 1 年目。 ・国盗館は行政で立ち上げ、今は指定管理制度で地元民 8 人で運営。	・佐久間高校、中学生、通勤に鉄道を利用。本数が少ないので車利用が多い。
		ここほれワンワン塾		・平成 7 年に設立。当初は 80 人だったが、今は 25 人。官民一体でやっていたが、合併したら、官はほとんど抜けてしまった。 ・国盗館で食事や買い物をしてもらえる。つぶ食(雑穀)のヘルシーカフェが出来ている。	
	佐久間	NPO 法人 がんばらまいか 佐久間	・飯田線の特急が停車する。 ・佐久間病院があり、ドクターヘリも飛ぶ。 ・平地は下水道が 70%普及。暮らしやすいところ。	・2 年前に NPO の店として「いどばた」をオープン。スタッフは 20 名。JAの跡地を改修。 ・NPO 法人には、全戸参加型で 3000 戸中、72%が参加。	・NPO タクシーに 11 人が登録し、1 日 2 台が営業中。料金は民間の約半額。地域外には規制で出られない。 ・城石には 3 世帯のIターンが昨年あった。 ・教職員住宅を活用して、2軒の定住お試し住宅を用意。70 坪の農地付。
		山 香 ふるさと村 女性部	・幼稚園や小学校があったころは子供と先生が味噌づくりの体験に参加したりしていた。6 年前になくなってしまった。 ・合併してから家族ごと引っ越してしまった人も多い。 ・浜松、浜北に在住している子供が多い。いずれは子供に家を譲って、こちらに戻ってくると言っている。 ・困っているのは食料品店が 2 店閉店したこと。車で 5 分のところに生協があるが、運転できない人が困る。 ・イノシシ、鹿、サルの食害がひどい。最近アナグマまで出始めた。昔は薪山でどんぐりなどの実があった。 ・山主は昔は羽振りがよかったが、今は国民年金だけなので高齢者でも働きに出ている人もいる。	・24 年前に鉱山の閉鎖で大勢が出て行った。廃校になった山香中学校を活用して開設。 ・年3回、出て行った人に山香の安心安全な農産物を送っている。最初は 600 人以上いたが、現在は 100 人ほど。会費は送料込みで 12000 円。お茶、シイタケ、きやらぶき、梅しそ漬け、こんにゃく、しょうがなど。 ・活動は定年退職した女性たち。利益は考えず、楽しみの場。会員は 20 名。実働は 15 名。 ・天竜JAの山の市に常設。町内イベントには必ず出店。月 2 回開催される遠鉄高架下の旬の味バザールにも出店。いずれも好評。	
	龍山	ドラゴン ママ の店「よらんかね」か工場	・旧浜松市までいかないと勤め先がない。子供の学校のため引っ越していく。 ・診療所が午後 3 時までなので不便。 ・高校はクラブ活動をしたら、ますます通えなくなる。 ・託児所がなくて困る。親は一日中、子供の送り迎えに振り回されている。 ・小学2年生の孫に「いつまでこの学校はあるんだろう」と聞かれる。同級生がいないのも切実。 ・移動販売を市がモデルで実施することが決定している。 ・地区内の日用品店が昨年閉店し不便になった。天竜の遠鉄ストアに行く。 ・下茶地区は、現在4軒のみ。 ・安全なものが食べられる。空気がよい。 ・免許がなくなると困る。	・お弁当をつくって高齢者に届けたい。 ・味噌、惣菜(こんにゃく、漬物、煮豆、らっきょう)などを加工。 ・若い人の希望でパンを製造。“お茶め”ロンパンを開発。	・Uターンの可能性は、先が見えないので極めて低いだろう。 ・食事処がまったくない。
		熊 NPO 法人 夢未来くんま	・しあわせ部どっこいしょで 7 地区に月1回出張サービスをしている。当初は 100 人ほどの高齢者が参加していたが、現在は介護認定になるなど 60 人ほど。 ・天竜・浜松まで行かねばならないので不安。 ・水窪や佐久間の不便さと比べられては、何もいえなくなる。 ・二俣あたりに生活基盤となる集積があれば助かる。	・生活改善グループが昭和 28 年から活動。昔から女性の活動が活発だった。 ・村の財産区の山林を売って施設を建設。早い時期から危機感があった。 ・平成 12 年に全戸加入で NPO 法人化。認可後に新人が入ってきた。23 集落に地区協力員がいる。 ・野菜の直売により、少ないが現金収入が得られることが励みになっている。 ・舞茸の工場が天竜から来たことで、舞茸蕎麦という売り物ができている。	・しあわせ部で有償運送を計画しているが、地区内から出られないという規制があり、踏み出せていない。 ・森林組合に若い人が入ってきている。
	春野	春 野 木材加工協業組合	・田舎暮らしは景色と空気と土地だけを楽しむのではなく、ひとつずつ自分でやってみて、わかることばかりで、やることで地元の人の気持ちもわかる。 ・ところが地域側は、田舎なのにみんな都会を望んでいる。おそれが現状と意思のギャップとなり、若い人が出て行くのは当然。 ・子供たちは中学は全寮制だった。小学校しか子供と一緒にいない家族も多い。		・26 年前に神奈川県から移住。家族と自然の中で暮らしたくて 34 歳で決断。雑誌に空き家があるという投稿があり、訪問し即決。地域の人たちの受け入れ態勢がよかった。空き家はこの地域では一番古いものだが、大家さんが掃除をして待っていてくれた。 ・移住してきたころに組合が立ち上がり、お客のことを考える人がおらず、手伝ううちに中心になっていった。 ・地元の木と地元のスタッフでどこに出しても恥かしくないものを提供しようと取組んだ。
		マルセン砂川共同製茶組合	・地域を維持することで、誰か新しい人が入ってくるかもしれない。 ・平野部に比べると、いろいろな役が回ってくる。楽しくやろうと仲間づくりをしたことが励みになった。30 代後半から 40 代の仲間がいる。 ・茶工場は一人では動かせない。	・30 年ぐらい前に 15 人ぐらいで組合を結成。高齢化したので、山村振興事業で3つの工場を合併させ、平成 7 年に組合を再結成。平成 8 年から製茶工場を稼働させた。 ・工場では、働く人、販売する人と分担することで生産力、販売力をあげることができる。 ・大学のときに有機栽培に興味を持ち挑戦。うまくいかなかったので、研修を受けた。	

調査対象			地域力		
定住条件(医療福祉、子育て、学校、買物、生活支援 等)			コミュニティ活動(食品加工、NPO 活動、施設運営 等)	その他(交通・インフラ、UIJ ターン 他)	
		- 後継者が出てきているが、モチベーションが無農薬栽培を継ぐという部分。 - 農家がやめて出て行ったところを買い取って、新規就農した若い人がいる。動機は有機無農薬栽培。 - 後輩のカップルが現在、定住中。個人だったら受け入れられないが、組合があるので研修生として受け入れ、本人たちも収入をわずかでも得ながら、チャレンジできている。 - 新規就農は、農地がすぐに借りられるわけでもないし、固定費もかかるし、こちらは若い人がいることで作業が助かる。お互いにメリットがある。	- 当初は品質で慣行栽培のものに太刀打ちできなかった。 - 市内の長田製茶と無農薬栽培の粉末茶を開発。高く売れるようになって、仲間も増え、技術もあがっていった。 - JASの有機認証を取得。 「有機無農薬」には宣伝力がある。売り先を確保できたことが大きかった。		
	NPO 法人 春野山の楽校	- 最近土砂崩れの危険が多い。70 年以上の山は自然淘汰されるから放置してもよいが、50ha 以下の山主が無責任。50ha 以上は山でお世話になっているという意識がある。80ha なら、1ha ずつ毎年伐採してもローテーションしていけば循環ができる。 - 地区 150 戸で小学生が 11 人。	- 高校生の宿泊体験施設であった県立春野の山の閉鎖を受けて、地元で運営することに。96 人まで宿泊可能な旅館業の許可を取得。会員は 30 人。市の助成を 3 年間受けている。 - 以前の施設のときにも食事の賄いなどは担当していたので、そのメンバーが移行。4～5人で交代してやっている。 - 集客はホームページとNPOのネットワーク。同じコンセプトの森林保全活用や環境教育の団体と連携。		
	有限会社 いっぷく処 横川		- 平成 6 年に 29 軒が 20 万円ずつ出資して横川生産物直売所利用組合をつくり事業化。平成 10 年に道の駅に。11 年に加工所を開設。順調に推移し、年間 6500 万円の売り上げ。 - 組合員は 28 名。50～70 代。販売3名、加工は 6 名でローテーションを組んでいる。 - 加工はすでにキャバがいっぱいなので、惣菜を中心にした加工と体験のための施設を次年度建設予定。 - 市民農園も 20 区画のうち 3 分の1ほどの整備を完了。 - 情報発信が重要とホームページを立ち上げた。	Iターン者は、横川に 5 軒、大平で 2,3 軒。	
引佐	NPO 法人 大好き 渋川 てん ゴー 渋川	- 昨年、交流のための空き家調査を実施。空き家は 10 数件あったが、土日に帰ってきて畑をやっていたり、トイレ、炊事場が使えない家ばかり。 - 熊までバスが通っていた。林業景気でにぎわったところだったが、今は渋川温泉も廃業。 - 浜松。浜北に勤めに出ている人が多い。小学校が今年で廃校になる。 - 移動診療所が一日おきの営業なので不便。ドクターヘリがある。 - 買い物はJA引佐や浜北の量販店に行く。	- 一人 10 万円 100 人が出資して、総合森林利用組合を昭和 53 年 11 月に設立。補助金を足してアウトドアアクティビティの拠点施設を整備。平成 17 年 12 月に NPO 法人化。 - 会員は 50 人。平均年齢 65 歳ぐらい。50 代～70 代。 - 年間利用者は 6000～7000 人(食堂利用者を含む)年々、減少傾向。 - イベント出店とコテージ収入が両輪。 - イベントでは、ごへいもち、焼き卵、さつまいもの素揚げが大好評。毎回 8 人から 10 人で行く。日当は 6000 円。年に 38～48 回出店。 - 休耕地が増えてきているので畑で農産物を栽培し、食堂で使ってみようと考えている。	Iターンは、オーストラリア人の英語の先生夫婦、磐田から来たリタイアした人などがいる。	
二俣	川島米穀店			- 米穀店として主食の米を人口減のところでやっているが、小さくてもやっていけるのはITのおかげ。ITには地域を変える力があると思う。身の丈にあったサイズのビジネスをしていくことが重要。そして、ここにしかないものをつくる。自分で市場をつくっていく。そのためにITを活用する。 - 合併して、浜松市が発信してくれるので助かっている。年寄りでも起業できる特区があればいいと思う。	
行政等	天竜区 森林整備課	- 旧浜松市などに住む子供たちが土日に北部に暮らす親のめんどうを見にきて、町場に連れ出すというパターンが多い。 - 救急は佐久間病院、天竜病院。3 時間かかったという人もいる。 - 産婦人科は愛知方面に行く人が多い。飯田線で東栄病院に行く人も。春野、天竜の人は浜北へ。		- Iターンは、交通アクセスがよい春野地区が多い。水場や平地が多いのも要因のひとつ。 - 飯田線は利用が少ないので市から補助が出ている。JR貨物でなんとか維持？ - 秋葉神社の観光客は多いが、スーパー林道ができて、上社に直接行く人が増えた。	
	教育委員会	- 少子化だが、学校数はあまり変化していない。北遠と引佐の減少が大きい。天竜市でさえも 100 人程度。三ヶ日も減っている。今春は引佐と河名小を統合。 - 中学校は統廃合はとりあえずはない。小学校はあちこちで検討中。 - 通学距離が大きな課題になってきている。スクールバス、路線バスなど地域によってばらばら。 - 旧市内は中心部が減少傾向だが、浜北きらりタウンは人口増と二極化に。 - 水窪は小学校1、中学校1でこれが限界。現時点でも通学距離が長い。 - 龍山は保護者からの要望で急遽、統合。スクールバスを出している。 4 月に河名小と引佐小が統合。	- 合併後に統廃合した廃校は教育委員会が管理している。地域の使用頻度が少ない(月1程度)ものはどうするべきか。 - 合併後に、山側と町側の学校交流が行われはじめている。たとえば河名の野外センターい連れていっている。北のほうには施設がない。龍山の青少年村があるが、利用はまったくない。合併後に北への関心が出てきているのだが。		
	企画部 資産経営課	- 廃校は数少ない平地なので、防災拠点にするという意見もある。有事のときに切り替えることができるようにする。 - 今までの廃校は、家具の木工所、製茶工場、集会所、資材置き場(運動場)などになっている。	天竜区の廃園・廃校は 2009 年 11 月から利活用募集中。2010 年 1 月末が締め切り。合併後、初めてのこと。	教職員住宅は古いものは耐震の関係で取り壊しているが、新しいものは用途転換を検討中。林業活性化のために活用したというのはない。材木置き場の要望はあったが、無料なので断っている。	

調査対象			地域力		
			定住条件(医療福祉、子育て、学校、買物、生活支援 等)	コミュニティ活動(食品加工、NPO 活動、施設運営 等)	その他(交通・インフラ、UIJ ターン 他)
	企画部 地域自治振興課	- 生活に必要なものが地域で揃わない。 - 外との関係が絶たれて孤立化しつつあるところも。 - 佐久間、水窪は高校からできがよければ浜松や掛川に出してしまう。昭和30年代から流出。 - 次の世代は天竜や浜北にいる。週末に親のめんどろをみにいっている。 - 昔の人は住み続けられるが、若い人は無理では？ - 佐久間、水窪の基幹集落は残していないと。 - ADSLまではネット環境は整備されている。 - 佐久間はもともと合併してできた地域なので、集落が散在していてまとまりがない。 - 地元住民に危機感がない。自分たちの世代で終わってもいいと思っている人も多いのではないかと。 - サル害が多い。 - 高齢者は年金があるので、ささやかなプラスαがあればよい。 - 農振がかかっている、旧浜松には住みにくくなり、浜北や天竜の西鹿島あたりに住宅が建設されている。	- 祭が維持できなくなっている。 - くんまは自分たちで稼いでいるが、がんばらまいか佐久間は独自事業が今のところない。	- Iターンは春野地区杉が多い。先輩がいると入りやすいようだ。天竜との道もよくなった。 - 龍山森林組合はIターンが多い。近くなったからか。 - 佐久間インターができると引佐に店の集積ができるかもしれない。	
	天竜区 振興課	- 保育所が足りない。 - 春野、天竜、龍山は交通の便がよくなってきて通勤可能になった。買い物も便利。浜松の郊外としての位置づけが定まってきた。 - 水窪は高齢化が進んでいるが、子供が祭りなどで帰ってくる。都市部に出ていった子供が帰ってきやすい状況をつくる必要がある。 - 天竜地区が水窪の防波堤になれないか。地価が浜北とあまり変わらないのが弱点。 - 現在は電車利用が可能な西鹿島駅周辺が人気。 - 町側は行政サービスを享受できるが、山側は提供してくれるところがないからサービスが受けられないという格差が出てきている。 - 旧市町村ごとに実施しているサービスを見直し、全体的に整備していく必要がある。例としては交通体系。行政側では交通と福祉は離れているが、合わせて考える必要が出てきている。		- 定住を希望し、何度も足を運んでいる人もいる。全地域に相談員を配置している。窓口は役場。 - 佐久間は教員住宅でお試し住宅を実施中。春野でも来年度、実施予定。水窪の教員住宅は古いので取り壊した。 20 年前に春野地区に別荘地域ができたが、あまり定住しなかった。	
都市からの視点	魅惑的倶楽部 (エキゾチッククラブ)		- 水窪に平成6年からミュージカルの開催をきっかけに通っている。 - 夏にはヤマメのつかみ取りのイベントの手伝いをしている。障害者の子供たちを連れて春にはお花見に行く。 - 交流する前は山や水のことは考えなかったが、町の人ももっと知るべきだと考え、水窪の間伐材を輪切りにし、山住神社の協力を得て焼印を押し、お守りとして300円で販売。障害者の子供たちが焼印を押し、100円は施設へ、100円は水窪のワンワン塾に、100円は当団体に。		
	浜松NPOネットワークセンター	副都心があって、小さいところの中心になっていくというような視点を持ちながら計画。交通体系が変わると天竜がキーポイントになるだろう。			
	NPOブレンディアの森		- 平成 11 年に東海トラベルの社員や水窪のメンバーと立ち上げた。 - 市内の雑木林が消えてしまっていたこと、山が荒れていることに気づいて。 - 山での遊びは文化的、教育的な価値がある。		
	NPO 法人 天竜川・そま人の会	山地の住環境をどう整備するかが課題。かつて出て行く人が植えた杉がそのままになって暗い。	- 平成17年から活動を開始。ロータリークラブのメンバー27名で結成。 - 北遠の「いいこと・いいとこ」の情報をネットで発信 「親子で楽しむ環境教室」を天竜区で開催。参加者は市の広報誌と自分たちのネットワークを使って集める。教育委員会はまったく協力してくれない。学校関係との連携は難しいことが多い。 - 山の説明、間伐体験、水の話、炭の火起こし、木を使った火起こし、山の幸の料理、薪割りなどを体験させている。 - 民話の里の語り部を呼んでコンベンションホールでイベントを開催した。	春野地区でリタイアした人が「おさるの便利やさん」という移動販売をボランティアで開始したと聞いた。	

③ 「地域力」ヒアリング結果のまとめ

<現状認識>

- 林業と公共事業、誘致企業が支えてきた地域産業の行き詰まり
- 次の世代の浜北等への移住による人口減、コミュニティ機能の衰退

定住条件で整理したデータにも現れているとおり、対象地区である中山間地は全般に産業衰退、人口減少、高齢化などの問題を抱えている。特に最北部に位置する佐久間地区、水窪地区では、鉱業や林業のが昭和 30 年代にピークを過ぎ、その後、ダム工事などの公共事業や企業誘致で雇用を保ってきたが、近年、産業構造の変化による進出企業の撤退が相次いでいるうえに、公共事業の縮小、JA の統廃合、合併による役場職員の減少などで、地元出身の若年の就業機会が大幅に減っている。

かつて地区の基幹産業であった林業も、昭和 50 年代以降の材木価格の値崩れにより、生計を立てていくことが困難となっており、近年では除間伐や枝打ち、下草刈りなどの森林育成の手間を掛けることもできなくなり、民有林では、事実上放置されたままの植林地がほとんどといってよい状況になりつつある。林業で生活できるのは、森林組合など公的な機関の職員や、一部の製材所などへ勤務する従業者などだが、人数としてはごく一部である。

それに加え、人口減少による商業や生活サービスの縮小、少子化による小中学校の統廃合など、若年層が子育てをしながら家族で暮らしていくのに必要な機能についても減退傾向が明らかであることが分かった。かつてのように、生活に必要なものが地区内で揃わなくなっている。(天竜区役所、佐久間・水窪 NPO ヒアリング)

そのため、地区内で中学校を卒業した子供が高校に進学するのを契機に、家族で新興住宅地として人口増加傾向にある浜北などに移住する家族が多い。(水窪 NPO)

人口構成を見ると、高齢者のみ、あるいは高齢者単身世帯が年々増加しており、今後は空き家も今以上に増加すると考えられる。一方で、地区内の林業や木材加工関連の事業所で若者が働きたいと思ってきても、空き家には仏壇があったり、本正月には都会に出た家族が戻ってくるために確保していることが多く、住むところがないといったミスマッチが生じている。(春野住民)

地域に残った高齢者は、地域の生活支援機能の確保と、自らの仲間づくり生きがいをづくりのために、道の駅などの加工・販売拠点を利用して地域住民（特に女性）が活動しているケースが複数の地域で見られる。こういった活動は住民同士、あるいは都市住民も含めた交流の場となっている。(龍山、熊、佐久間、横川女性グループ・加工場)

以上のとおり、地域全体として、「地域力」の衰退傾向は明白である。ただ、昔と比べて道路インフラは確実に改善されており、地域内の中核拠点である天竜地区や、浜北、旧浜松市街地へのアクセスは、以前より容易になっている。

<課題>

- 生活支援機能（医療・福祉、買物等）・サービスの充実が課題
- 「このムラに住みたい」と思う人が住み続けることができる適正な支援策
＝地域 NPO 等の自助サービス＋道路インフラを活用した広域サービス等の検討
- 都市と中山間地との往来生活を可能とする住宅政策、生活支援策

対象地である中山間地の特徴として、集落が小規模に分散して立地していることがあげられる。そのため、基幹集落から離れた小規模集落ほど、十分な定住条件を整備することは今後ますます困難になってくることが予想される。

そのため、地区ごとの特性や課題を踏まえた定住条件を満たすための生活支援機能のあり方を、地区ごとに肌理細かく検討していくことが必要である。そのため、地区ごとに必要となる生活支援機能のリストアップを行い、基幹集落に整備するもの、天竜や浜北（旧浜松）に依存するもの、公共サービスや、NPO による支援サービス等で補完するものなどを体系立てて整理し、支援策を組み合わせしていくプロセスを具体的なアクションプログラムとして明示していくことが効果的であると考えられる。

この際、かつてのように地区内で全ての機能をフル装備することは困難な社会・経済情勢となっていることを認識し、広域拠点整備による複数地区をカバーする支援サービス実現や出張サービス（医療、福祉、買物など）なども検討していく必要がある。

優先順位としては、公共交通に頼らざるを得ない（自家用車の利用が困難な）高齢者への医療福祉、買物等の生活支援機能の充実が急務である。また、地域の将来ビジョンを睨みながら、若者が地域に定住し、子育てしながら暮らすことができるような支援策も検討すべきである。

特に、地区内に今後増加すると思われる空き家の有効活用や、遊休施設を活用した住宅機能の整備など、新規就業を志す若者が地区内にて移住するのに必要な住宅政策も必要であると思われる。

また、道路インフラの充実を活かし、都市から通うことができるメリットを活かした「浜松市型二地域居住（都市・中山間往来）スタイル」の可能性についても検討する必要がある。

< 具体的方策 >

地域力の充実に向けた具体的方策

**基本方針＝「基幹集落を中心とする適正な生活支援機能の整備」と、
「広域ネットワークによる高度機能の支援機能充実」。さらに
「“ヤマの暮らし”と“マチの暮らし”の連携による将来ビジョンの構築」**

◆山村の自治的機能＋広域ネットワークによる支援機能

- ・各地区の基幹集落を中心に、診療所、デイサービス・訪問介護センター、生鮮品・日用雑貨の商店、保育園・幼稚園、小中学校など、地域生活に必要な機能をパッケージで整備する。
- ・これに加え、対象地区の中核機能を有し、浜松駅まで 30 分の鉄道アクセスである天竜地区周辺に、広域をカバーする中核的生活支援機能を整備する。

◆I ターン・定住の促進

- ・I ターン者の中山間地への定住策の実施。公的支援も含めた住宅政策を充実させる。
- ・林業をはじめとする中山間部における新規就業支援と定住促進のための施策を肌理細かに実施する。

◆浜松型「市内二地域居住」スタイルの可能性検討

- ・浜北や旧浜松に住み「山村に戻らない」次世代の若者層が、週末などに山村に通う関係づくりが必要である。
- ・都市部の「利便性・安定的雇用」と、中山間地区の「環境・農業」の美味しいところ取りを具現化する施策を検討する。

【参考】特定非営利活動法人 がんばらまいか佐久間（天竜区佐久間町佐久間）

NPO 法人「がんばらまいか佐久間」とは

- ・ 平成 17 年 7 月 1 日設立
- ・ 自分達で出来ることは自ら実践し、それぞれの立場で町づくりに参画する機運と「がんばろう」という気持ちの高まりを表現（当地方の方言）
- ・ 地域住民まるごと参加型の組織である
総住民参加型の組織は全国で 4 例目
 1. 新潟県 旧安塚町
 2. 岐阜県 旧山岡町
 3. 岡山県 旧哲西町
 4. 静岡県 がんばらまいか佐久間

会員の資格

- ・ 正会員：理事・感じ・活動委員会正副委員長（43 名）
- ・ 活動委員：サービスを提供する会員
- ・ 賛助会員：サービスを受ける会員

会員数と活動委員

- ・ 会員世帯 1,538 世帯（定住世帯の約 77%）
- ・ 会員 3,092 人
活動会員 741 人
賛助会員 2,351 人

財産基盤

①合併前、佐久間からの支援

- ・ 基金として 1 億円（この内、1000 万円を NPO タクシーへ、500 万円を NPO のお店「いどばた」へ繰入、残額は国債を購入し、運用益を活用）
- ・ 運営資金として 1,500 万円(年 500 万円 3 年分)のところ、現在 1,100 万円残あり

②会費

世帯会費として年間 1,200 円(月 100 円)

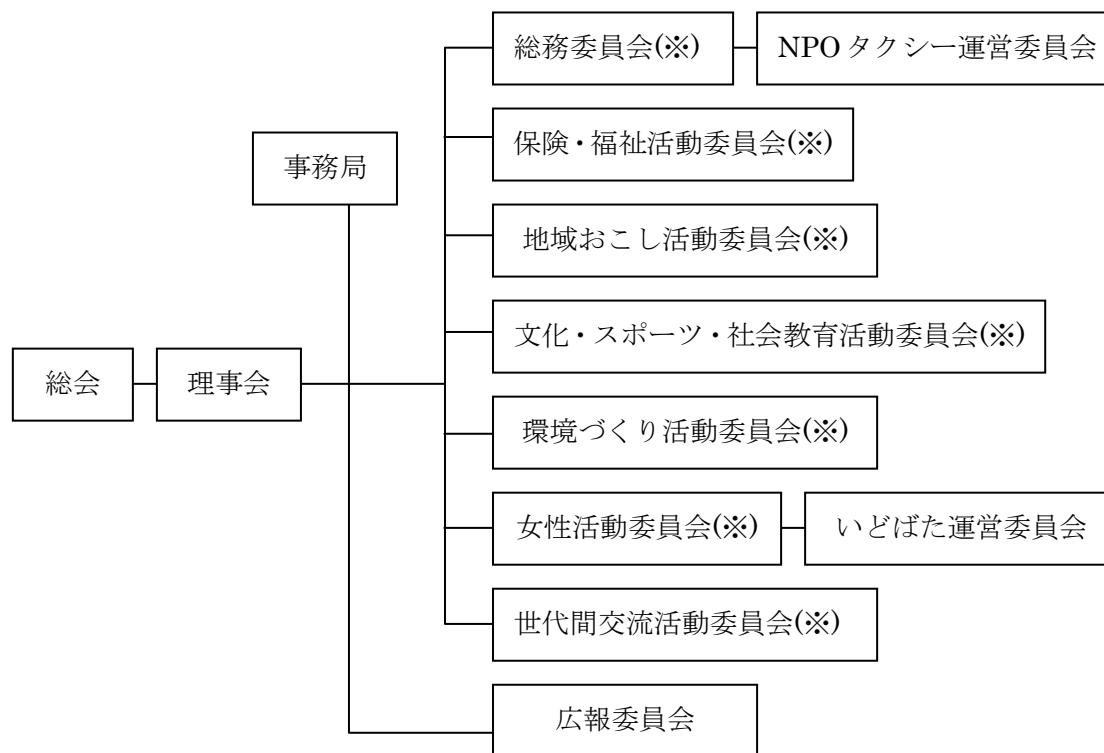
③その他

- ・ 市補助金（敬老会等）
- ・ 市委託金（歴史と民話の郷会館等）
- ・ 寄附金

NPO 活動の今後の課題

1. 後継者の育成と活動会員の意識の向上、会員数の維持確保など
2. 安定的運営のための基礎的財産基盤の確立
3. 行政との共助・共同の体系的仕組みづくり

NPO 法人がんばらまいか佐久間の組織



※委員会それぞれに委員長

取組み事業

その１ 過疎地有償運送事業（NPO タクシー）

- ・ 町内の公共交通の空白地域を補う目的で平成 19 年 8 月運行開始
- ・ 運行内容 月～金曜日 7:00～16:00
- ・ 運行範囲 町内全域

その２ NPO のお店「いどばた」

- ・ 高齢者の食生活支援、地場産品の販売など、女性の活力を地域おこしに活かす拠点として 2008 年 6 月に開店。
- ・ NPO が 500 万円を拠出し。JA 事務所の跡地を改修。
- ・ スタッフ 20 人がシフトで運営。メニューはそばといなり・巻寿司、家庭料理の惣菜が人気。売上は約 800 万円。
- ・ 隣接の佐久間病院利用時に立ち寄る人が多い。



N
P
O

なかよく
なんでも
ぱぱっと
ぴかっと
おおきな
輪と和

ぼくの名前は、「がんばる君」。
今、合併を前に立ち上げようとしている
特定非営利活動法人「がんばらまいか佐久間」
のマスコットキャラクターなんだ。
一生懸命「頑張る」という意味なんだけ
けど、あんまりつらいのはコメントでしよ。
やっぱり、活動を長く続けていくには「楽
しさ」もなくてはね。
だから、見てよ。ぼくの顔は「晴れやか」
に笑っているんだ。「頑張る」と笑顔で「晴
れやか」の「がんばる君」なんだよ。
みなさん、よろしくね!

がんばるで、いっしょに
がんばらまいか。



がんばる君
(頑張る)

エヌ・ピー・オー
特定非営利活動法人 (NPO 法人)

がんばらまいか佐久間 設立へ



NPO 設立時の住民への配布チラシ

	がんばらまいか 佐久間	発行: NPO 法人「がんばらまいか佐久間」 発行責任者: 大平 秋男
		第11号 発行日: 2009年6月5日

近年、団塊世代から若年層まで、新しい価値観を求め「ふるさと暮らし」志向が高まっています。
ここ佐久間町にも移住しがんばっている人達がいます。
今回紹介します今畑さんは、ご夫婦そろって NPO 法人「がんばらまいか佐久間」設立当初から、
講演会、説明会などへ積極的に参加し、いつもさりげなく様々な作業に協力していただいています。



佐久間に住んで:
がんばっています!



平成15年4月1日浦川
で田舎暮らしを始める。
中学2年の春、突然原
因不明の心臓発作におそ
われ、47年間苦しむこと
になりました。田舎暮らし
が良かったのは、病院
が近くにある家を探し、
浦川へ来ることになりま
した。

平成15年は、体調の良
いありがたい年であつた
が、翌年春ごろから発作
が止まらなくなつて秋に
ハートセンターで手術を
受け、健康を取り戻すこ
とができました。



妻と6匹の犬たちとの田
舎暮らしは、野菜つくりと
木工品つくりを楽しくみな
がらの夢と幸せ探しの感謝の
旅路です。

文・今畑 正隆 (柏古通)

そんな時、NPO 設立の
話を聞き、NPO の活動に
この健康を生かすことはで
きないだろうか?と考へ、
NPO 法人「がんばらまい
か佐久間」の活動には極力
参加し、長年仕事で培って
きたノウハウ、技能をフル
に生かしてボランティアに
チャレンジし、できること
は何でもやろうと取り組ん
でいます。

会員向け広報誌 (I ターン特集)